

# 日本橋附近

田山花袋

青空文庫



日本橋附近は変つてしまつたものだ。もはやあのあたりには昔のさまは見出せない。江戸時代はおろか明治時代の面影をもそこにはつきりと思ひ浮べることがは困難だ。

あのさびた掘割の水にももはやあの並蔵の白さはうつらなかつた。あれがあるために、あのきたない水も詩になつたり絵になつたりしたのに……。それでも去年の暮だつたか、あの橋の上を歩いていると、かしましく電車や自動車の通つてゐるのを余所よそに、一艘いっそうの伝馬てんまがねぎの束ねたのや、大根の白いのや、漬菜の青いなどを載のせて、小刻みに小さな艦ろを押しながら静かに漕いで行くのを眼にしたことがあつた。私はたまらなくなつかしい気がした。じつとその野菜舟の動いていくのを見詰めた。

その掘割の水は例によつてわるくさびていたけれども、それでもそこにその野菜や船頭の影が落ちて、それが皺しわをたたんださざ波の底にかすかながらもそれと指さされるのだった、私は遠い昔の面影をそこに発見したような気がした。何もかも移り變つて行つてしまつている中に——ことに震災以後は時には廃址になつたかとすら思われるくらいに零碎れいさい

に摧<sup>さいげん</sup>残されている光景の中にそうした遠い昔の静けさが味わわれるということは、私に取っては何ともいえないことだった。ことに、その日は冬の霧のどんよりとした空にどこからともなく薄日がさし添って来ているような日で、午前十時過ぎの静けさが統一しないバラツクの屋根やら物干やら不恰好なヴェランダやらを一面におおい包んでいた。物干の上には後向になった女の赤い帯などが見えていた。

それにしても魚河岸の移転がどんなにこのあたりを荒涼たるものにしてしまったらう。それは或はその荒涼という二字は、今でも賑かであるそのあたりを形容するのに余り相<sup>ふさわ</sup>応しくないというのもあるかも知れないが、しかもそこにはもはやその昔の空気が巴<sup>うず</sup>渦を巻いていないことだけは確かであった。どこにあの昔の活発さがあるだろう。またどこにあの勇ましさがあるだろう。それは食物店の屋台はある。昔のままの橋寄りの大きな店はある。やっぱり同じように海産物が並べられ、走りの野菜が並べられている。屋台の鮓<sup>すし</sup>を客が寄って行って食っている。しかし今ではそれを食ったり買ったりするものが半分以上変って行ってしまっているではないか。江戸の真中の人達というよりも、山の手の旦那や細君が主なる得意客になっているではないか。従って盛り沢山な、奇麗な単に人の目を引くだけのものの様な折詰の料理がだらしなくそこに並べられてあつたりするではないか。三

越が田舎者を相手にするように、ここ等の昔の空気も全くそうした客の蹂躪じゅうりんするのに任せてしまっているではないか。それが私にはさびしかった。あたりがバラツクになったと同じように、また並蔵の白さが永久に水にうつらなくなつたと同じように、洗濯物を干した物干が大通りからそれと浅く透すかされて見えるように。

## 二

ある日私は大通りからそつちの方へと入つて行つて見た。

私はそこにガラス窓や、ドアや、不恰なヴェランダや、低い物干台などを発見した。二条三条ある横の通りを縦に小さな巷路こうじの貫ぬいているのを発見した。新開地でもあるかのように新しくぞんざいに建てられた二階屋の軒から軒へと続いてつらなっているのを発見した。しかもところどころに空地があつてそこに夕日がさし込んで来ているのを、二階の小さな窓のところに柘榴ざくろか何かの盆栽が置いてあつて、それにその余照が明るくさし添っているのを発見した。これが魚河岸だろうか。かつてはこの大都会の胃であり腸であつた魚河岸の内部だろうか。それは私とて今までに一度だつてその内部に入つて見たことが

あるのではなかった。それはその内部に知っている人でもあって、それが案内でもしてくれたなら、入って見ることも出来たであろうが、あの雑踏ざつとうでは外から来たものが内部まで入って見ることはとても不可能であったのであった。私は書生時代にいつも橋のこつちたもとの袂から四日市の方へと近路をして抜けて行ったが、その時分の雑踏はとてもお話にならないものだった。まごまごしていれば、（何だ！ この小僧、邪魔なところにいるな！）といわぬばかりに突き飛ばされた。従つて魚河岸は東京でも一番活発なところ、また一番わかりにくいところとして常にその頃の私の頭に印象されて残っていた。それだけに廃址という感じが一層はつきりと私の頭に來た。

私は川に近い通り——大きな魚問屋があつて、鮭たらだの鱈たらだの一杯に昔並べられてあつたところ今はさびしく荒涼とした通りになつているところを通つて、四日市の通り近くまで行つて、そしてまた細い巷路に右に入つて行つて見た。昔のままの大きな蒲鉾屋かまぼこやがただ一軒そこに残つていたりなどした。バラックであるせいもあるうが、あたりが何となくがらんとして、昔は厚く塗りがためた土蔵づくりの家並ばかりだったので、さし入りたくも容易にさし入れなかつた午後四時過ぎの日影が、そこにもここにも、格子の窓にも、家と家との間にある細い路地にも、シタミの横のところにも、共同の水道の口からほとぼしり

出している水にも、そこに立っている女の横顔にもまた通りを昔と違った幅で歩いている赤ぶちの大きな犬の尾にも、昔の伊達気分などはもはや少しも持っていないだろうと思われるような小料理屋の招牌かんぼんにも、自由自在にさし入って来て、至るところにその静けさとさびしさを展ひらげているのだった。私は古都でもさまよっている詩人のようにして静かに歩いた。

かん茂の半ペン、弁松のあなご、そういうものにも長く長く親しんで来たが、今ではもはやそれを本当に味わうことは出来ないなどと思いつながら、また、そういうものがあたりの変遷と共にみんな亡びて無くなつて行くことなどを悲しみながら、私は長い間その界わいを彷徨ほうこうした。

私は震災の時のことなどをくり返した。このあたりでも逃げおくれで屍になつて水に浮んだものの多かつたこと、舟に一ぱい乗るには乗つても、兩岸の火で熱くつてとてもたまらなかつたということなどをくり返した。巷路からこつちへと出て来るところには、山くじらを買っている店のあるのなどを眼にした。

私は、今から四十五、六年前の日本橋をここに描いて見ようと思う。丁度私が生れて九年十ヶ月という時である。年号でいえば明治十四年の春から秋にかけてである。私はその頃京橋の南伝馬町の有隣堂という農業の書などを主として出版する本屋に、無邪気な可愛い小僧として住みこんでいたのであった。

私は何んな日でも京橋と日本橋とを渡らない日はなかったことを思い起した。私は重い本をしょつたり、又は至るところの本屋の店にこつちで入用な本を書いた帳面を持って行って見せたりなどした。それにしても遠い昔だ。今通つて見て、それが同じ大通りだとは夢にも思えない。雨が降ると泥濘が波を揚げるといふ都会。家並が大抵土蔵造りだったので、京橋の向うの銀座の新しい煉瓦れんがの街に比べてわるく陰気な大通。その中をあのラツパを鳴らした円太郎馬車が泥を蹴立てて走って行くといふ有様だった。それにしてもあの日本橋から少しこつちに來た右側に——今の黒江屋か塩瀬あたりのところに、須原屋と山城屋との二軒の大きな本屋が二、三軒間を置いて並んでいて、例の江戸時代の本の絵に出ているあの大きな四角な招牌（？）がいかにも権威ある老舗しにせらしくそこに出されてあつたものだった。それにしても何といふ淋しい陰気な本屋だったろう。ただ角帯をしめた番頭が

二、三人そこここに、退屈そうに座っているだけで、ついぞ客など入って本を買っているのを見たことはなかった。それから比べると、あの三越の前身の越後屋の角店は大したものだった。でそれは今でも何うかすと古い絵などに出ておるが、一階建ての長い廊下のような店で、オウイ、オウイという声が絶えずあたりに賑かにきこえたものだった。そして客という客は皆な並んでそこに腰をかけた。つまり番頭が小僧にあれを出せこれを出せという声がそういう風に一つの節となつてあたりに響きわたつてきこえたのであった。これは越後屋ばかりではない、あの本町通を浅草橋の方へ行く路の角には、それよりもつと大きいあの大丸の店があつて、それでも、そのオウイ、オウイをやつていたのである。

日本橋から浅草の方へ行くのには、今は本石町が主路になつてゐるけれども、その時分には、本町通——乃すなわち今の山口銀行のあるところから入る路がその主路になつてゐて、電車になる前の鉄道馬車はかなり後までそこを通つていたのである。私は当時の流行唄であつた『ほつぺたおつつけ、合乗ほろかけ、てけれつのは、てけれつのは』などを唄いながら小走りに、よくそこ等を走つて通つて行ったものであつた。

その時分では、銀座は新式のいわゆる煉瓦町であつたが、京橋から日本橋、目鏡橋めがねばし（万世橋）にかけては、ほとんど洋館という洋館はなかつた。ただずつとこちらに来て、

あのもと二六新報社のあつたあたりに朝日屋という大きな洋風な建物があつたのを記憶している。そこではどんなものか知らないが、ケレイ酒というものを売っていた。その宏壮な建築も（今なら高が知れていようが）当時の人目を聳たしめたものだった。

#### 四

数年前に北京に行つて、あの正陽門外の混雑——いろ／＼な店やら屋台やらが一杯に並んで、路傍で人が平気で物を食つていたりするを見て、明治の初年の文化にほうふつとしているのを思い出したが、実際、その時分には、日本橋の橋畔あたりの賑いもそれと少しも違うところはなかつたのである。そこには種々な食物の屋台が、汁粉とか、団子とか、金つば焼とか、ちよつと一杯立寄つてやる屋台とか、おでんかん酒とか、そういうものがわずかなすき間もないばかりに一面に並んで連なつていたのである。否、そうした沢山な食物店は、においや形かたちや色彩で往来の人々の食欲を刺激したばかりではなく、さま／＼な呼び声で『ちようど今出来たてのほやくだ！』とか、『それ、うまい、うまい団子だ！』とか叫んで、そして一人でも余計にそこに客を引きつけようとしていたのである。私

は今でも大きな傘の下で江戸時代でなければ見られないというような鼻の大きなおやじが小僧相手に安ずしを握つては並べ握つては並べていたさまをはつきりと想い起す。また江戸橋のほとりに、でろれん祭文の興行場があつて、そこで一人の小男がそのまわりに大勢黒山のように客を集めていたことを想い起す。菓物くだものなども沢山に屋台の上に並べてあつて、あの西瓜の弦月形に切つたやつを通りかかりの小僧が上からかぶりつくようにして食つていたことを想い起す。恐らくその時分に日本にやつて来た外国人の眼には、今の私が北京の正陽門外の雑踏に対したと同じように夥おびただしく非文化にうつつたに相違ないのである。たしか、ピエル・ロチの書いたものの中にもそうした一つの描写があつたように私は記憶している。

続いてそうした旨うまそうな食物の屋台にまだ十歳になつたばかりの私が忽ち引き寄せられて行つたさまを想い起す。ありもせぬ銭をそのためにつかひ果してしまつたことを想い起す。それは小僧をしくじつてしまつたのは、他にも二、三の原因はあつたけれども、そうした路傍の食物を心ゆくばかり食わんがために不良な行為に墮おちて行つたのがその一つの原因であつたことを想い起す。またこの大通りには至るところに錦絵を並べた店があつて、そこに芳年の『月百姿』だとか永濯の『歴史百景』だとかいうものがかけられてあつたの

で——否浅草あたりのそういう錦絵の店には、春画に近いものまでもかけつらねてあったので、びっくりしたような心持で、更にいい換えれば、その時分には、他に雑誌などというものがなかったのも、そういう錦絵のようなものの中からそつと人生やその人生の底に深く蔵されてある秘密をのぞくというようにして、長い間じつとそこに立尽していたことを思い起す。しかし江戸時代には、日本橋の畔ほとりも、決してそうした無秩序ではなかったであろう。もつと整理されたものであったであろう。そうした混雑は明治の初年の空気が名残であったということが出来るであろう。その空気——そのデジエネレイトした空気が私には懐かしい。

## 五

震災後は何うなつて了しまったかわからないが、大通と南仲通との間に細い路地があつて、小僧時分に私が面白がつてよくそこを通つたことを思い出した。私は南伝馬町から一町ほど日本橋の方へと歩いて来て、すぐ左に入つて、それからその路地を縫うようにして通つて行つたのである。勿論それは二人と並んでは通れないような路だった、溝板の上を拾い

拾い、またはそうした下町に住んでいる人達の裏面の生活をのぞき、狭い勝手元で下女が釜や鍋を磨いていたり、たらいを抱えて粹かみな上さんが洗濯物をしていたりするところを掠かすめたり飛んだりして通って行く路だった。そしてそれがその横に通っている路をつらぬいて、また向うに入って行くのだった。少くともこの路地は風月堂の裏の少しこつちあたりから、ずっと長くあの白木屋の通りのところまで通じていた。私は江戸橋から人形町の方へと行く時には、いつもその路地を抜けて行くのを例としていた。

震災前でもあのあたりで昔のままの家屋を依然として保持しているというような家は少なかった。僅か五、六軒しかなかった。私はそこを歩く度にいつも人事の変遷すみやの速かなのと時代の推移の急なのを感じずにはいられなかった。一つの時代の推移と共に一つの異なった空気がかもされて段々その形やら感じやらが変って行った。人と共にあたりのさまが変って行った。あの通四丁目の北側に大きな時計台があつて、その横町があゝの八重洲橋に向つていたなどとは、今日では誰も知っているものはあるまいと思う。ただその家屋はなくなつてしまつていても、その昔知つていた店が点々としてそこに残つてゐるのは懐しかった。風月堂は丁度私の奉公していた本屋の筋向いになつていたので、あの篆てんじ字で書いた軒ののれんには私は終日長く相對していたものだった。またそれから少しこつちに來

て、松月堂という菓子屋があつて、そこで紅梅とか何とかいう赤い青い小さな珠のような菓子を、店の女隠居から買いにやられたものだが、今でもその菓子があるか何うか。

丸善の向う側からなお少し向うに行つた角に、小さなそば屋があるが、あれも私に取つてはなつかしいもの一つだった。なぜなら、あのそば屋は昔はもつと大きく、てすりを取廻した二階などがあつて、その年の大晦日の十二時過ぎに、私のいた店の番頭達が、一年の労を慰めるために小僧達をそこにつれて行つて御馳走したことがあつたからであつた。その時分のあの大通の大晦日のにぎやかさは、今とは全く趣を異にしているが、しかもその人出の多かつたことは、とても今の比ではなかつたようだ。夜店が一杯に両側に出て、植木などが並んで、カンテラの煙が悪くむせるように街上をくすぶらしていたものだった。それからそのはつきりした位置は忘れたが、通四丁目あたりの南側で、古風な格子窓をその背景にして、そこに大きな丸い盤を斜て立てて、あの濁黄色のどろ／＼した漆を、長いへうで頻りに夕日に掻き回しているものあつたことを、私は未だにはつきりと記憶している。

## 六

私は日本橋を渡りながら、いつも蒲原有明の詩を頭に浮べた。

朝なり、やがて濁り川

ぬるくにほえど、夜の胞よるえを

たゆらに運ぶおぼめきに

なほも市場の並蔵の

壁にまつはる川の靄。

朝なり——やがてほのじろく

水面にうつる壁のかけ——

明りぬ、くらき水底も——

大川つたひさす潮の

力逆押すにぎり水。

明治三十九年から四十年、丁度日露戦争の済んだ頃で、一時小説よりも詩歌の方が文壇を風靡ふうびしたことがあったが、その頃この詩がよく文学青年の口に上ったものだった。私はその頃外国文学に読みふけて、よく注文した本の届いて来ているのを本町の勤めている

所から丸善へと取りに行つたものだった。あの頃はまだ橋が今の鉄橋になつていなかった。古い古い木橋だった。『改築したら好きそうなものだ、随分ぼろ橋だ。市に金がないのかな！』こんなことを私達はよくいつたものだった。

流るゝよ、あゝ瓜の皮

核子、塵わら——さかみづき

いきふき蒸すか、靄はまた

をりをりあをき香をくゆし

滅えなづみつゝ朽ちゆきぬ。

水際ほそりつらなみで

泥ひじばみたてる橋はしら

さては、なよべるたはれ女の

ひと目はゞかる足どりに

きしきし嘆く橋の板。

それを、その橋をあの江戸名所図会にある橋と比べ、また明治の初年食物店や興行物で

その袂たもとが埋められた頃の橋と比べ、更に今の電車や自動車の駛走しそうしている橋と比べ、更に遠く家康が入国してここを埋め立ててはじめて架橋した時のさまに比べて考えて見る。恐らく誰でも不思議な心持に誘われずにはいられないに相違なかつた。否、その有明の詩の時分からでも、あたりのさまが夥しい変遷をした。新しい潮流が何べんとなくやって来ては、あたりの店の外観をかえシヨウウインドーの飾りつけをかえ、そこらにわずかに残喘ざんぜんを保つようにして巴渦うずを巻いている昔の街のさまをかえた。しかも過渡期は依然として過渡期だつた。いくら綿密な計画のもとに運ばれた努力でも、容易にその外観の統一を求めることは出来なかつた。否、そうしている中にあらゆるものを破壊したあの恐ろしい震災がやって来た。そして長い間の人間の努力を一炬いつきよの下に焼き尽してしまった。あの橋が鉄筋であつたがために焼け落ちなかつたのは、せめてもの見つけものといわねばならぬ。

朝なり——影は色めきて

かくて日もさせ、にぎり川——

朝なり、なべてかゞやきぬ

市場の河岸の並蔵の

その白壁も——わが胸も。

今はすでになくなってしまっていて、その並蔵の朝の白壁のさまがまだその詩の中に不滅に残されてあるということは、われ等の心を喜ばせずには置かなかつた。私は再びその詩を声高く吟じて見た。

## 七

いつかNとこんな話をした。

『君、あそこいらが夜にさえなると真暗になった時代があるんだからね。それを考えると不思議な気がするね』

『本当ですね……』

『そしてそれがあまり遠くないことなんだから……。つい六、七十年前まではそうだったんだから……。たしかピエル・ロチだつたと思うが、あの汽車のない時分に、車で日光にはるばる出かけて行つたと思ひ給え。そしてあそこでさびしい夜に逢つたと思ひ給え。かれはさもさも驚いたように、世界にもまだこんなところがあるかというように、日が暮

れさえすれば真暗な都会、ともしび一つ見えないやみの仏陀の都会——そういう風に一面は驚き、一面はその神秘を讃嘆するように書いてあったが、江戸の大都会だって、やっばりそうだったんだからね』

『辻斬の町、泥棒の町、罪悪の町、妖怪の町だったんですね』

『去年に八十五で死んだ伯父の話では、それでもところどころに、今の三越のある少し手前ぐらいのところに二文ぐらいで食えるそば屋——それも屋台か、でなければ他の店の片隅でも借りたような小さな店があつて、そこにかすかに灯がともっていたということだよ。よく芝居でやったり、講談で読んだりするじゃないか？』

『そうですね』

『大通りは、それでも提ちようちん灯をつけたものや、駕籠に乗って例の提灯を飛ばして行くものが少しはあつたそうだよ。遠くから見ると、その提灯がチラチラ動いて綺麗だったそうだよ』

『ところが、今ではそんなことを考えて見るのもないですからね……。昔からやっぱりこのように明るくつて、にぎやかで、人通りが多かつたと思つていらっしゃるんですからね……。』

Nはこういったが少し考えて、

『外国でもやっぱりそうだが、この灯火の変遷ということは興味のあることです。外国の小説にもランプをつけた時代のことが書いてありますが、日本でも、松明たいまつ、結び灯台から燭台、行灯あんどん、ランプと変って行った形は面白いですね』

『そしてその度毎に世界が明るくなって行った筈なのだが、馴なれてしまうと、そう大して有難くも思わなくなってしまうものだね。不思議なものだね』

こういつている中に、話はいつか大通りの両側にずっと並んでつけられた石油灯のことに移って行った。成なるほどその時分には昼間掃除夫が一つ一つ石油をツイで行って夕方になると、長い金の棒かねの先に火のついたのを持った点火夫が小走りに走りながら、その両側のガラス灯の戸を巧たくみにあげたてしてそして一つ一つ火を点じて行くのだった。それは当時十一になつたかならない幼い私の心を惹ひくに十分だった。私はその点火夫のあとについて一散に走つた。

『見ている中に、一つ一つだんだんついて行く形が愉快なんだよ……。ああもうあんなところまで行つた——こんなことを言つて、じつとそれを見ていたものだよ』

『つまり闇の都会から、今日の明るい都会に到達する過渡期だったわけですね』こんなことをいってNは笑つた。

## 八

十軒店があそこでひとつの巴渦うずを巻いているのは面白い。時の変遷につれて、あの魚河岸でさえ昔の面影をとどめなくなっているのに、ここにはいつまで経っても同じような特色ある小繁華を成している。敢て江戸時代がここに残っているとはいわれない。また長い間の種々な影響を受けないことはない。私の知っている限りにおいても、ここも一時非常に衰えたことがあったようである。三月の雛ひなや五月の幟のぼりなどを弄ぶということが非常にきゆう旧弊へいのようにいわれて、そんなものを人が振り返つても見なかつた時代が暫くはあつたようである。私はその時代を微かすかながら知っている。何でも明治二十年から二十五、六年代であつたと思つている。その時分には、あそこで稼業かぎよう替えをしたものが沢山あるときいている。いまいろ／＼な銀行だの会社だの多くまじつているのはその時分他の店に變つて行つたものがそのままになつてゐるらしい。

何といつても、その反動が来て、西洋がなくては夜も日も明けなかつたやつが、急に保守的に保存的になつて行つたということは、この狭いひとつの街に取つて非常に有難いこ

とであらねばならなかった。次第に私はそのあたりが新しい活気を帯びて来たことを覚えている。店などにも昔風のものでなしに、たとえ昔風であったにしても何等か新しいものを付け加えたものを並べるようになって来たことを覚えている。それはああいう雛とかのぼりとかいうものは何といても古典的クラシカルなものである。近代的のものもたらして来るような繁華をそこに現出することは出来ない。しかし三月に、五月にあの特色あるにぎやかさがそのあたりに展開されるということは、外国人などに取っては、非常に興味がある。また詩にでもなりそうなひとつの楽しい光景であらねばならなかった。

江戸人とか江戸人の家庭とかいう感じは、本町の奥の方に行くときまだ余程多く残っているが、しかもあそこいらはわるく衰えて行ってしまうので、感じがいやに重く、沈ちんんでんし切ってしまったような形になっているが、この十軒店あたりに残っている江戸の人達には、新しさに触れる機会が多いせいとか、どこか生々したところがあって、その雛やのぼりが新しくなっていくのと同じように、一種の新しさをかもし来ているのは愉快だ。私達はどうかするとそこいらで昔の江戸の粋と今の東京の艶麗さとをひとつに混ぜたような美しい人に出会えることが出来た。またいかに新しい江戸という感じを持った家庭をもそこに見出すことが出来た。その意味からいっても、私はこのあたりの空気が好きだ。

あの大通りからちよつと入った田月の菓子なども私は忘れかねた。否、菓子がうまいばかりではなく、あのあたりには昔の江戸の空気が依然として巴渦うずを巻いているのがなつかしい。それからあの稲荷ずしなども時勢には伴わないものだがちよつと面白いものといつて好かつた。かつてずつと前にその稲荷ずしと千住の大橋の袂にあつた稲荷ずしの優劣を論じたことなどもあつたがそれももう昔のことになつた。

## 九

日本橋附近という題目からはやや遠くなるけれども、あの眼鏡橋めがねばし（万世橋）あたりのさまざま次手ついでにここに書き残して置きたい。そこは明治の初年の錦絵にも新東京の名所のひとつになつていてあの眼鏡のような丸い空間を二つ持った石造の橋は、いなかから出て来る人達をめずらしがらせたものだが今ではその橋もその位置も全く変つた。その昔のさまを知っているものは少ないであろうと思われるが、それでも私はおりくそこに、その今の万世橋の北側の欄干らんかんによつて立留つて、その当時のさまを眼の前に浮べて見るのが、例だつた。

私はその時分の橋の上の賑かであつたことを、またそのこつちに渡つて来たところにきかない共同便所があつて、上野あたりに出かけて行く時には、私もよくそこで用を足したことを、またそのこつちが火除地になつていて、そこにまばらに柳の緑がなびいていたことを、その火除地というのは明暦の大火があつたために、丁度震災後に小公園を多くする必要を感じたと同じ理由で有名な橋の袂には必ずそうした広場がつくられてあつたものだが、そこに露店だの小興行の肆みせだのがにぎやかに並んでいて、時には砂書きや大道易者が大勢そこに群集をあつめていたことを思い浮べた。またその橋をわたつた向うのところは、中仙道を旅行するものの最初の出発地点になつていて、馬車屋があつたり、馬車が何台となく並べられてあつたりして、越後信濃上野あたりから来る人達は、皆そこを東京の内部の門戸として続々として入つて来たものであつたことをくり返した。私は今でもそこに夕暮の空気に包まれて、馬車や馬車の白い蔽おおいや馬のだぶくした腹巻や大きな荷物を持った疲れた旅客などをはつきりと思ひ浮べることが出来た。私は交通の変化があたりの空気を全く変えて行つてしまうことを思わずにはいられなかつた。眼鏡橋を渡つてすぐ入つて行く講武所の細い通りなどは、その時分は賑かなものだったのである。そこに住んでいる人たちにも、またそこらを歩いている女たちにも、何処か昔の江戸らしい粹なところがあつ

て、何となく濃こしまかな空氣の渦を巻いているようなところだったのである。私はそこを歩くことが好きだった。眼鏡橋をわたつて、その細い通りをぬけて、大時計のあるひろ／＼とした広い道に出て来ることが好きだった。それはずっと後になってからだが、その広場に出ようとするところの左側にその時分評判だった紅葉の『伽羅枕』と露伴の『ひげ男』とが両々相並んで『読売』紙上に載せられるという大きな広告の絵看板が出たことを記憶している。恐らく小説を大道に広告した絵看板は、これが最初ではなかったであろうか。

私達の若い心はその時分すでにそうした新しい文学に向つて夥しく波を打っていた。私はそこを通るたびにいつも何ともいえないあこがれを抱いてその絵看板の前で立ち留つたことを今でも記憶している。

## 十

本町の社につとめている時分、そこから通三丁目の丸善へと行くために、よくその日本橋を渡つて行つたことを思い起した。それは私に取つては忘れられない記憶のひとつだった。私は昼飯の済んだあとの煙草の時間などによく出かけた。そして私はあの丸善のまだ

改築されない以前の薄暗い棚の中を捜した。手や顔がほこりだらけになることをもいとわずにさがした。何ゆえなら教育書の中にフロオベルの『センチメンタル・エヂュケイション』がまぐれて入っていたり、地理書の棚の中にドストイフスキーのサイベリアを舞台にした短編集がまじって入っていたりしたからであった。私はめずらしい新刊物の外によくそこで掘出したものをした。そしてその本を抱いてにこ／＼しながらもどって来た。

少くとも丸善の二階は、一番先きに新しい外国の思潮ののぞかれるところであった。それは今日考えれば、辺鄙な田舎の文学書生がその町の書店にならんでいる雑誌や本から東京の中央文壇をのぞいて見るよりもっとく／＼たよりないものであったに相違なかつたけれども、それでも新しい外国を知るには、その門戸によるよりほか何うすることも出来なかつたのであった。私はその棚を通してアルフォンス・ドオデエを知り、エミル・ゾラを知り、レオ・トルストイを知り、イプセンを知り、ビョルンソンを知った。パウル・ブルジェの短編集『ハステル・オフ・マン』を手にした時には、何ともいえない喜びで、何べんその本のクロオスをなでたか知れなかつたことをくり返したい。ことに忘れられないのは、モウパッサンの例のアメリカ廉価版が何冊か届いて、それを電話で丸善から知らせて来たので、金のないのを無理に出版部に行つてたのんで工面してもらって、あたふたと

急いでそこに出かけて行ったときのことであった。たしかそれは明治三十四年の六月の中旬だと思っているが、まだ日本ではその頃はモウパッサンという作家の何ういう作家であるかというのを余り多く知っているものがないばかりではなく、その赤い黄いアメリカの廉価版も私が注文してはじめて日本に入つて来たようなものだった。私はごく／＼する／＼のような喜びに満たされながら半ば土蔵づくりで半ば洋館づくりの不調和な、その時代の統一しないさまをそのままそこにあらわしているような大通りをさみだれの雨にぬれつつ／＼歩いて来たことをはつきりと覚えている。

否、ナチュラリズムでも、デカタンでも、人道主義でも、またネオ・ロマンチズムでも、すべてその一書肆の門戸から入つて来たということは、今考えて見ると、不思議に思われた。そういう形からいっても、その日本橋の大通りは私に深い縁故を持っているものといつて差支さしつかえなかつた。

私はどつちかというところ、いろ／＼な通を並べたり、またいろ／＼な食物店を食つて歩いたりする方ではない。従つて日本橋界わいあたりの細かいことは知らない。鮎すしだとか、天ぷらだとか、そういうことも詳しく知っているとはいえない。木原店も浮世小路も歩いたことは歩いて、大したことは知っていない。しか丸善の棚をとおして、十九世紀末から

二十世紀の初期にわたって海外の思潮に触れた形は、私に取ってはひとつの誇りとするに足りた。私は今でもその頃のことをおり／＼思い起した。

## 十一

通四丁目の角から入って行った細い通りにある静かな一室で私達はこんな話をした。

『ここいらも裏に入ると、まだすっかり駄目ですね？』

『ええええ』

昔、この土地で鳴らしたM、舞踊であちこちの舞台にもその顔を見せたM、それが今このお上<sup>かみ</sup>になつていて、ということは何となく私にはさびしかった。それはその態度や声にはまだ昔の若々しさが残っているけれども、またそこに昔の艶<sup>あで</sup>な美しい空気が深くたたまれているけれどもわざとじみにしているそのつくりの中に何となく年を取ったさびしさがのぞかれて見えた。

『丸で、まだ広場のようなところがところ／＼残っているじゃありませんか？』

『何でもここいらはまだいろ／＼変わるんでしよう……。何うなるかまだ本当のことはわか

らないんじゃないでしょうかね』

『厄介だな!』

『だって中々大変ですからね……ここいらは、それでもまだ回復した方ですよ』

『それはそうかな?』

私はさかずに酌をしてもらって、『震災の翌年だけに、ちよつとここに来る用があった、その時にも、やつぱり、こういうところの人だちはえらいな、何のかのいいながら、すぐこう復興するからな。やつぱり女だな、女の髪には千鈞せんきんの力があると昔からいわれているが、やつぱり本当だな!』と思つたことがあつたですからな!』

『そういうわけでもないんでしょうけどもね?』

Mはさびしそうにして笑つた。その笑いの中にはすでにいろ／＼なことを通り越して来た——恋のさま／＼の姿にも散々触れて来たものしか持ち得ないさびしさがそれとなくこめられてあつた。『でもやつぱりそうしなくては困つてしまいますからね——』

『やつぱり女の力はえらいということになるのですよ。男というものは、自分は困つていても、可愛い人のためには何うにでもしてやるものですからね……』

普通なら、『覚えがあると見えますね』とか何とかいつてまぎらせてしまう。だけれど

も、Mはそれもいわずに笑ったまま黙っていた。私も真面目にならずにはいられなかった。さつきMから聞いた言葉——『三年前になくなられてね……。本当に、一時は何うしようかと思いましたよ。年取ったねえさんだちが待合でもしなければならぬなんていうのをよく耳にしていたものですが、そういう心持がよくわかりましたよ』といった言葉がそこに繰返されて来た。私はそっちへ引つ張られて行った。

『そして、旦那とはいつからですか？』

『十五年も一緒にいたもんですからね……。それに、別れ方があつけなかつたもんですから……』

『何うしたんです？』

『胃潰瘍で、血を沢山吐いたりして、すぐでしたから』

『それは気の毒だったね』

『もう少しね、話でもするひまがあつたらと思いましたがよ』

昔のことなども少しはきき囁つて知っているので——一時新聞などでその艶話を伝えられた名高い帝劇の役者とも二、三年前の舞台の上の急死であわただしく別れて来ているのを知っているの、一層そのMの身の上に心を惹か<sup>ひ</sup>れずにはいられなかった。

## 十二

『時というものは早く経って行ってしまうものですね……。初めて逢った時分には、あなたもまだ若かったがな!』

そうした言葉はMを動かさずには置かなかつた。

ほかの座敷に客もなくつてひまだつたためか、Mはそこに落付いて座つて、いろ／＼と話をし出した。震災の前と後とではそこにいる妓だちの上にも多くの変遷があるのだった。『お、もうあの人もいないのかえ? どこに行つたんだね。大阪へ? それじややっぱり向うにいい人がいたわけだね』こんな言葉がそれからそれへと出て行くのだった。

その日はなぜかMは非常に感じ早かつた。丸で別な人か何ぞのように見えた。話し上手で、しゃれがうまくつて、真面目で、それでいてどこか澁はつらつ刺としたところのあるような妓だったが、今ではそのいろ／＼な氣質がなくなつて、あとに真面目なところと感傷的なところだけが目に立つて残つた。かの女は深川で生れて、下谷の三筋町で育つて、それから赤坂へと行つた話などを段々そこに持ち出した。やっぱり橋や建物の上に移り変りがあ

つたと同じ様に、かの女の上にも艱難かんなんがあり、全盛があり、恋があり、生活があつたのだつた。

『向うにいる中はダメでしたけども、此方に來てから水が性に合つたと見えて、たちまちここでおばアさんになつて了しまつたんですね』などと話した。

『あなたは紅葉さんは知らんね』

『お目にかかつたことはございません。何しろ、あの方はお八重ねえ姫さん時分ですから……。姉だと、きつと知つているかも知れませんけども……』

順序としてそこに鏡花君のことだの、後藤宙外君のことだの、最近になつては、長田幹彦君のことだの、水上瀧太郎君のことなどが出て來るのだった。もと蔵田屋といった料理屋の額を鴉外漁史が書いた話なども出て來た。この狭斜は大通の雑踏と混雑とにまぎれて、ちよつとは目に立たないような形になつてゐるけれども、それでも中に入ると、昼間でも三味線の音がしたり、しよしゃ酒な二階屋があつたり、細い粹な露地があつたりして、何となくそぞろ心をすかされるようなところだった。鏡花君がひどく酔つて仙女香のころから京橋あたりを一晩中彷徨して夜を明かした話などを私はまたしても思い起した。

『丸で知つてゐる妓はいなくなつてしまつたね。心細いな……。やっぱり何かあると、それ

をきつかけに、止さずにいても好いやつをぐんぐん止して行ってしまふんだね。Sなんか引いてしまったのはさびしいな』

『そのくせいる妓はいつまでもいるんですけどもね』

こんなことをいって、Mはそこにあつた紙刷物を引寄せた。

ここの感じはどつちかといえ、静かで好かつた。それも川向うとか井の頭とか丸子園とかいうあたりの静けさとは違つて、混雑の中にうずめられたといったような静けさ——にぎやかさの静けさ更にいい換えれば、あらゆるものの整つた上にひとりでにかもされて来る静けさといったようなものだつた。食物の上にも、また三味線や唄などの上にも従つてどこか安心して落付いて座つていられるというようなところがあつた。——そこに一番先にかけてHが『今晚は！』といつて入つて来た。

## 十三

八重洲橋のなくなつたのは、そう古いことではないが、それでもあそこにならぬ橋があつたなどとは誰も想い出しもしないようである。それは通四丁目の大時計のあつた通り

をずっと右に入つて行つたところにあつた。私はその頃牛込に住んでいたが、いつも九段を通つて、丸の内をぬけて、その橋をわたつて大通の方へへ行つた。それは明治二十二年頃だつた。私はよく槇町の北中通の古雑誌屋へと出かけて行つた。それはその時分には、外国のグラフィックなどの附録についている銅版画がよく装飾品として売れたので、それでそういう外国の古雑誌店があちこちにあつたからである。そしてその雑誌や銅版画の中に何うかするとその時外国で評判になつている小説などが混つて入つていたからである。ウイルキイ・コリンズの『ムウン・ストーン』などという本をもう少し後になつてからそこで買った。ウイリアム・ブラック、アンソニー・ホオプなどのものもそこになれば、ビクトル・ユウゴオやユウセン・シュウのものなどもそこにあつた。

私は丸の内のさびしかつたことを思い起す。乳の形をしたカンのついた大きな門や、なまこじつくいひの塀や、壊れた大名屋敷の格子窓のついた長屋のあつたことを思い起す。またその間の路は長くつて、また雨の降つた時などは路がわるい上に横しぶきにしぶくので、傘も何も役に立たなかつたことを思い起す。たしかそこには司法省だの裁判所だのがあつたのを覚えている。私はそこを通つて、八重洲橋に行つていつもほつと呼吸いきをついた。なぜなら、そこはちよつと景色がよかつたからである。古い土手の松が大きな根をそこにな

ねらせていたばかりではなく、淡い緑の枝が形よく濠ほりの水にその影を落していたからである。私は時にはその土手にのぼって、その松の根に腰をかけて足の労つかれを休めながらあたりを眺めた。檣町で生れた私と同年ぐらいである女はいつた。『そうですか、あなたもあの土手にのぼったんですか……。あすこにはつくしやたんぽぽが出るので、子供がよく登って行ったもんですよ。私の総領の娘なんか、よくあそこに上ってしかられましたよ。あの時分には、あそこいらに行くのに、いつも山につみ草に行くっていつて出かけたもんですよ。あそこの中は原が多かったですからね』

実際うつりかわりというものは不思議なものだ。川ならば瀬が常にかわるように都会の繁華の巴うず渦もまた絶えず変って行っているのである。そこに渦が巻いているかと思うと、いつの間にかそれが別な方へと行っている。かと思うと、また此方が繁華になるというような風である。だから何どうなるかわからない。奈良の都のあとが今日は麦畑になっているように、あの日本橋や三越あたりにぎやかな繁華なところがいつの間にか再びもとの野原になつてしまふかわからない。もし何かの都合で遷都でもあれば、すぐそうなつてしまふのは目に見えている。

## 十四

私は長い間大晦日かその前の晩かに、きまつて万世橋から大通りをずっと歩いて見るところを一年中の楽しみにしていた。兎に角に今年も過ぎた。自分の思ったようには行かなかったにしても先ず一つの宿駅を通過した。そういう心持が私をいつも一つの落着きに伴って行くのだった。私は静かにアスファルトの上を歩いた。

しめかぎりの竹の葉に電気がかがやいて、店という店がみんな忙しそうにしている中を静かな足取りで、いつものような屈託くつたくもなければ心配もなく、よし心配があつたにしてもそんなものはわきの方へと押しやって、その晩一晩は何も考えずに、全くの人生の傍観者でもあるかのように、またその身ひとりがこの世界中での一番のんきなものでもあるかのように静かにブラリ〜と歩いた。そのくせ、何を買うのでもなければ何を食うのでもなかった。ただ灯が明るい中を巻煙草をふかし〜歩いた。

ひとつの低徊ていかい——たしかに人生の中のひとつの低徊だった。そしてその時ほど人生のことがはつきりと私の胸に浮んで来ることはなかった。それは平生とて人間や人生のことを考えないのではない。むしろ私はどんな時にでも人生を考えないことはない方の質たちだ。

しかしその巴渦の中には落着いて悠遠な境まで入って行くことが出来なかつた。いろ／＼な雑念がすぐそれを混乱させた。従つて私に取つてはその低徊は非常に有意義であつた。私はあちこちの角で立留つたり、シヨウウインドウの灯の前に足をとどめたり、日本橋の橋の欄らんかん干のところで長い間立尽していたりした。私は静かな落着いた心持でそこらをいそがしそうに行つたり来たりする人だちを眺めた。

私はずつと真直に歩いた。それも大抵は右側を。そしてその小僧時分にいた有隣堂の前では、いつもきまつて足をとめた。一度はひとつ訪ねて見ようかしらなどと思つたこともあつた。それは主人夫婦はもうとうに死んでしまつてゐるにしても、その時十八、九であつた総領の娘はまだ生きてゐる筈であつた。しかしたとえこつちから名のつて行つたところで果して当年の小僧六蔵を覚えてゐるか何うか。そういう疑問がいつも私をそこに入つて行こうとする心から引返させた。

京橋を渡つてからは、私はきまつて左側を歩いた。

ある年のその夜は、私につく／＼この人生の生がいのあることを痛感させた。それは明治四十二、三年頃だつた。身体は丈夫だし、酒は飲めるし、男ざかりではあるし、書いたものは世間に迎えられるし、これがかつて角帯の草履姿で重い本を背負つてあえぎ／＼

大通りを歩いていた一丁稚いちでっちだろうか。そう思った時には何ともいわれない気がして——  
むしろ今こそ人生の底にぴたりと触れたような気がして、身体がはち切れそうな充実をそ  
こに感じた。

『多幸多福！ これに越す多幸多福があるか？』

私はこんなことを心の中に叫んだ。

私はその大通りの中に私の一生のリズムがはつきりとたどられるような気がした。そこ  
にいろ／＼な私があった。妻を伴つれた私、子供をつれた私……。今でも私はその大晦日の散  
歩をやめようとはしなかった。

## 十五

三越の新館を見に出かけた。それは静かな明るい初夏の日の午前だった。私は多くの人  
達のようにエレベーターで七階まで行って、そこから屋上庭園へのぼって行った。

光線のキラ／＼する中につつじが鮮かに咲いて、かたつむりの形をした噴水器から細い  
水が静かにほとばしるように両方に出ていた。草花が赤く黄くまたむらさきにあたり綴

られていた。(こういうところも好いな)私の胸にはまたしても私たちの若い時のことが繰返されて来るのだった。私たちの若い頃には、退屈したりつまらなくなったりすると、わざ／＼遠く上野とか芝公園とかいふあたりまで出かけて行かなければならなかったものだが、今ではこういうものが市中にある。ちよつと電車に乗って来て、すぐこうした明るい光線に浸ることが出来る。またそこに来て、ベンチに腰でもかければ、ちよつとした退屈や不平ならまぎらせることが出来る。また通りがかりなどにちよつと入って見て、いろいろなものを見て気を晴らすことが出来る。少くともこうしたものがここにあるということは、都会でなければ得られない一つのめぐみであるといつて好かつた。

約束してそこで落ちうのにも好いだろうし、手軽な見合などするにも好いだろうし、また小説のひとつのシーンになるような場合も決してすくなくはないだろうなどと思つて、あちこちと歩いた。私はこの時ふと三越の常務をしている浜田四郎君のことを思い出した。私は浜田君とは本町で一緒に机をならべていた。それは今から二十五、六年も前のことだった。私達は『太平洋』という日本の最初のグラフィックを編輯へんしゅうしていた。浜田君はその時学校を出たばかりで、ハイカラな新知識で、その週刊の経済面を担当していた。その時分、浜田君は頻しきりにこのデパートのことをいつていたのである。また広告(宣伝)と







# 青空文庫情報

底本：「大東京繁昌記」毎日新聞社

1999（平成11）年5月15日

初出：「東京日日新聞」

1927（昭和2）年4月19日～5月5日

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2013年5月15日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 日本橋附近

## 田山花袋

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>